

真宗大谷派金沢教区 解放運動推進委員会 公開講座

私が私であるために

「コロナ時代に生きる苦しみ」

松田彩絵

公開講座

私が私 のために

令和2年

12月15日 火

受付 13:00

開会 13:30 閉会 16:00



Sae Matsuda
LETS仙台所長
社会福祉士 保育士

講師：

松田彩絵さん

【Profile】まつだ さえ
1989年生まれ。山形県山形市出身。
宮城学院女子大学学芸学部発達臨床
学科で保育と社会福祉を専攻した後、
数社で福祉職を経験。2016年より貧
困問題に取り組む。

講題：

コロナ時代に生きる苦しみ



会場：金沢東別院 真宗会館ホール
金沢市安江町15-52

※当日は、真宗会館運営費として200円(お一人)を
お願いします。受付にていただきます。

主催：真宗大谷派金沢教区解放運動推進委員会 お問合せ：金沢教務所 076-265-5191

共催：金沢教区教化委員会 社会教化小委員会・男女共同参画推進小委員会

聞いてください

「貧困、暴力、孤独。事情は異なれど困っているひと達がたくさんいます。そして新型コロナウイルスに伴った「ステイホーム」により、家庭内での暴力が増加しています。暴力が原因で家にいられないと感じながらもアパートを借りる資力のないひと達は、暴力に耐えながら生活を続けています。そのために身体を売らざるを得ないひともあります。そういった「貧困女性」に対する差別は女性の孤独を助長し、社会復帰をどんどん難しいものにしていきます。様々な事例を交えながら、彼女達をどう支えていけばいいかをお伝えします。

知ってください、わたし達のこと。そして助けてください、貧困にあえぐ女性達のことを。」(松田彩絵)

松田彩絵さんは、「LETS仙台」を立ち上げ、貧困や暴力に苦しむ女性達に避難場所を与え、また彼女達が自立する道を模索されています。コロナ禍で拍車がかかった貧困の苦悩、差別による孤独を共に学びませんか。一人でも多くのご参加をお待ちしています。

※「LETS仙台」は、様々な理由で家に帰れない女性のための、困った時に駆け込めるケアハウスです。

日 程	受 付	13:00	聴講無料
	開 会・勤 行	13:30	
	講 義	14:00 (休憩)15:40	
	質 疑・応 答	15:45	
	閉 会・恩 徳 讃	16:00	



※新型コロナウイルス感染症拡大により石川県から緊急事態宣言が発令された場合、または開催不能と判断される場合は、会場にてオンライン(zoom)配信をします。

新型コロナウイルス感染拡大防止 および感染予防対策について

下記の対策を実施いたします。
何卒ご理解とご協力をお願い申し上げます。



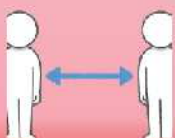
マスク着用にご協力ください



手指の消毒をお願いします



体調不良の際はご来場をお控えください



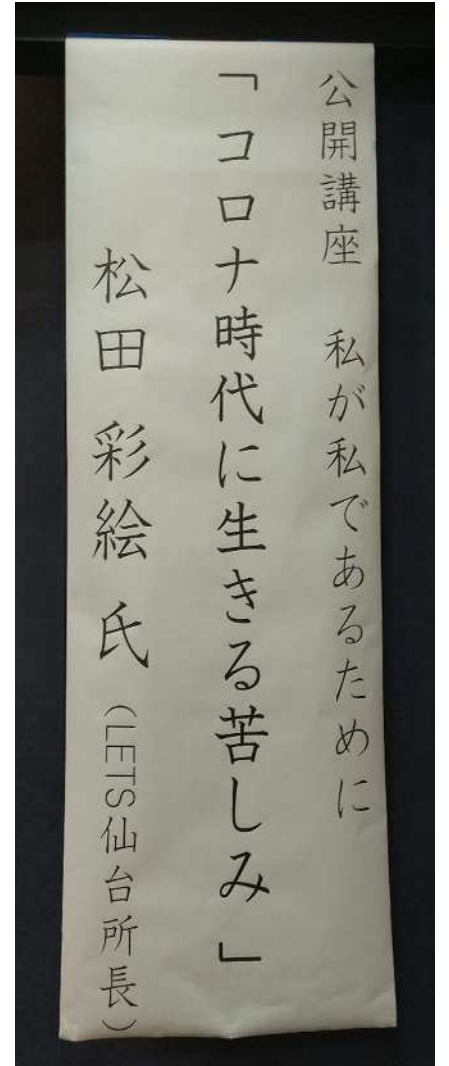
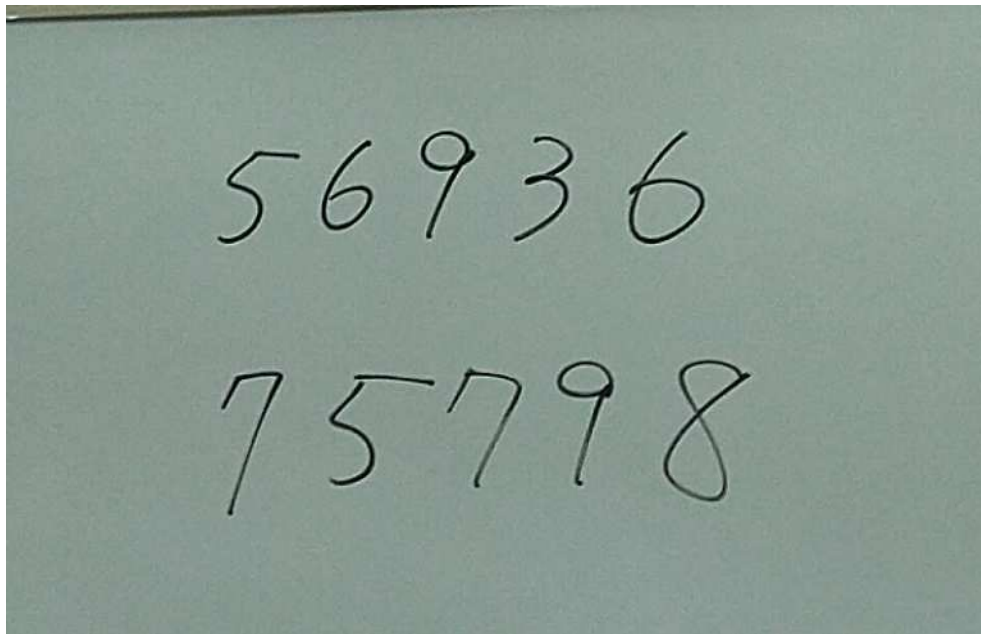
座席の間隔を開けています



場内の換気、湿度は適正に保たれています



入口付近で赤外線温度計による体温検査を実施いたします
(37.5℃以上の発熱が確認された場合は、ご入場をお断りします)



「コロナ時代に生きる苦しみ」

まつださえ
松田彩絵

■はじめに

はじめまして。松田彩絵といいます。

読みが難しい名前ですが、私の生まれた日の朝焼けがとても綺麗で水彩画のようだったということで父が名付けてくれました。とても絵がうまそうな名前ですが、実のところ、絵はいわゆる「画伯」レベルで全くセンスがありません。猫を描いても犬を描いても同じ絵を描いてしまいます。最近一番酷かったのはロバの絵で、ロバと知らずに見た友人たちに「ブタ？いや：キリンの可能性も：でもシマウマっぽい気もする…」と言われたほどの天才具合です。絵が描けない分音楽は少し得意で、曲を作って歌ったりもします。ギターとドラム、ピアノが趣味です。パソコンで音楽を作ることも好きです。

二〇一一年三月に宮城学院女子大学学芸学部発達臨床学科を卒業しました。幼児教育や保育をベースに社会福祉を専攻し、資格は国家資格だと社会福祉士、保育士で、教諭免許は幼稚園教諭を持っています。民間資格や任用資格を含めると資格数は十種類くらいだったと思います。多すぎて自分でも把握できていません。決して資格コレクターとかではなく、大学在学中に取れる資格を全て取ったからこの数になりました。社会人になってから取得した資格は社会福祉士と仕事で必要だった福祉用具専門相談員のみです。

福祉職を転々としてから二〇一九年五月よりLETS仙台という女性用ケアハウスの所長を務めています。また二〇二〇年五月から特定非営利活動法人キミノトナリの理事になりました。また、日本脱カルト協会の会員としてカルト問題、特に二世問題にも取り組んでいます。LETS仙台とキミノトナリについては後で詳しくお話しします。

前置きが長くなってしまいました。今日はLETS仙台やキミノトナリの活動内容を交えながら若年貧困や若年妊娠、またカルト二世の支援についてお伝えしたいと思います。

前半では貧困女子などの現状について。後半では事例を交えながら具体的な支援方法についてお話しします。

■お寺とコンビニエンスストアの数

二〇二〇年十一月二〇日現在、全国にコンビニエンスストアが56、936店舗あります。それに対してお寺は全国に75、798箇所存在しています。

私たちの生活にとっても身近なコンビニエンスストアより、お寺の数のほうが圧倒的に多いことをご存知の方もたくさんいらっしゃると思います。今日お話しする事例は日常、いわゆる「普通」からは程遠くかけ離れているものです。しかしその「非日常」はよくよく目を凝らして社会を見ると他人事ではなく皆さんの隣にもあるものです。コンビニに買い物に行くように、困っている人たちが駆け込めるお寺があればこの国の福祉は一気に良いものとなっていきます。本日は休憩を挟んで、おおよそ一時間半お話しさせていただきます。どうか他人事としてではなく、ご自身がいつ関わってもおかしくない話として聞いてください。発展途上国で起こっているような悲劇が、今日も日本で、さらに言う和金沢でも起こっていることと思います。

■ LETS仙台について

LETS仙台は仙台市の某所に作った女性用ケアハウスです。DVや貧困など様々な事情を抱えた女性が駆け込んでくる場所なので場所は非公開です。私の大学時代の恩師で、日本キリスト教団の牧師である竹迫之（たけさこ）いたる）さんが購入した中古の一軒家で、困っている女性たちを保護して、私も女の子たちと生活を共にしています。衣食住を共にすることで女の子たちの些細な変化に気づくことができ、困りごとを早期に見つけるところが最大の強みです。例えば夜中に悲しいことを思い出した女の子が泣き出した場合、気が済むまで背中をさすりながら話を聞いています。一緒にどうするか考えて生活を考えていくので、利用者とスタッフ、また利用者同士の距離が他の施設と比べて近いという特徴があります。さまざまな制約を受けないために任意団体としてスタートしましたが、現在は法人化に向けて活動中です。報告義務は増えますが、受けられる助成金の数が魅力的で、背に腹は変えられないためです。財政状況は非常にカツカツですが、相談件数は右肩上がりが必要な施設であることを痛感している日々です。

LETS仙台でのルールは3つです。

- ① 家事は自活すること
- ② 自分の意思でLETS仙台にいないこと
- ③ 他害行為（人を傷つける行為）がないこと。

この他害行為には「ライフスタイルへの干渉」も含まれます。朝起きるのが遅い、ごはんを食べなさいなど、口頭で相手の生活に干渉することは禁止しています。もしみなさんが施設に入所することになったとして、利用者間で干渉があることは嫌なことだと思います。よってLETS仙台では利用者間で干渉はせず、お互いを尊重することを大事にしています。

日本はまだまだ男女が平等な社会とは言いい切れません。また女性は出産育児に際してどうしても環境依存の生活を送りがちになります。その時に環境が悪化すると環境に依存するほかない女性は一気に貧困化します。例えばDVや虐待などの暴力が大きな原因になり

がちです。また、売春をしている女の子を世間は責めがちですが、女の子を買った男性が責められることはあまり多くありません。女性が弱者に陥りやすい世の中なのです。よって女性を支援することは、たとえ焼け石に水だったとしても必要な取り組みなのです。

■ LETS 仙台をはじめた理由

女の子の事例を一つご紹介させていただきます。

彼女は幼少期に病気がちでずっと抗生物質を服薬していました。他者に感染する病気ではないのに、保育園から通園を拒否されてしまい、やむなく病気の理解がある幼稚園へ転園することになりました。

その子が小学校に進学すると、そこはとても複雑な学校でした。学区の半分近くが国家公務員の家庭で、残りは公営団地の家庭でした。貧困やひとり親家庭などが筆頭に挙げられますが、公営団地にはさまざまな理由を抱えたひとたちが住んでいます。彼女は公務員の娘だったのですが、団地に住んでいる子たちとどうしてもうまくやっていくことができませんでした。間違っていると思ったことは「おかしい」とはつきり言いがちな性格であり、小柄だったこともあっていじめを受けました。一口にいじめと言っても無視などの精神的なものもあれば、上履きなどの物を捨てられるということなどもありましたが、彼女が受けたいじめの大半は身体的暴力でした。毎日新しい傷ができ、一番ひどい時には、先生が見ている目の前で首にのこぎりを3本当てられ、「騒いだら殺す」と言われるようなこともありました。先生も止めようとはしましたが、先生に対して「先生が動いても女の子を殺す」と言われ、どうやって解放されたかわからないほど長時間拘束されたこともありましたが、結果的にそのいじめは事件として全国紙の新聞に載ってしまいました。彼女は同級生の親にその事実を知らされましたが、彼女の家族はその事実をつい先日まで知らずに生きてきました。親にバレたら怒られると思った女の子が必死に隠していたためです。その報道を受けて教育委員会も本腰を入れて動かざるを得なくなり、スクールカウンセラーを2名学校に常駐させる手段を取りました。20年前としては異例な事態です。その後彼女は親の転勤に伴い小学校4つ、中学校を2つと転校して行きましたが、暴力による精神的な傷はそう簡単に癒えるものではありません。その結果、どこに行っても誰とも安定した信頼関係を築けないという後遺症が残りました。学校に行っても孤独、家だけが安全基地。そんな状況で彼女は怯えて生きる他ありませんでした。

中学に上がると彼女は勉強して、県内で10位以内の高校へ進学できる学力を身につけました。しかし高校願書提出一週間前に見ず知らずの男子高校生に強姦され、男性が怖くなり、やむなく偏差値を下げて女子校へ行くことになりました。

高校時代は友人や恩師に恵まれ、部活とオタ活に明け暮れる日々を過ごし、初めて落ち着いた時間を手に入れることができました。大学も私立大を受けることにし、将来のプランも見据えられるようになりました。しかしそんな彼女によくわからない症状が起り始めます。時々発作的に胸が痛むという症状は小学生時代から持っていました。その発作に加えて激しい立ちくらみやめまいが止まらなくなりました。ひどい時には座っている椅子から転がり落ちるほどでした。

大学に進学してから精密検査を受けましたが、特に所見がなく、彼女についての病名は「自律神経失調症」でした。大学時代は中学時代と比べ物にならないほど勉学に励み、さまざまな本や論文を読み漁りましたが、二年生の後半でいよいよ見て見ぬふりをしてごまかしてきたメンタルの病気が本格化していききました。訳もなく泣き出す、突然怒る。それを支えた友達や教員の苦労は絶えなかったものだと思います。バイト、サークル、大学。どうにか全部やり切って社会に出ましたが、そのときには彼女にはもう精神的にも体力がほとんど残っていませんでした。

大きな団体に新卒で就職しましたが、そこでは入社一年目から複雑な人間関係の中に置かれ、友人間でも会社内でも孤立しました。道化のフリをして生きて、その結果風邪薬を二百錠飲んで自死未遂を行いました。それでも死ねずに何年も苦しい思いをしてきました。

そんな困難な人生を歩んできて、彼女もようやく自分を受け入れてくれる男性と知り合いました。程なくして結婚しましたが、精神的・金銭的DVを受けて、結婚後わずか二年弱で離婚せざるを得なくなりました。その際に夫からの風評被害があり、「友達」だと思っていた人が半減しました。

こうやってお話ししてみると、改めて踏んだり蹴つたりの人生だと思いました。これは全部私の話です。ずっと誰かに助けて欲しいと願っていた人生でした。でも自分でSOSを出す発想を持たず、また、SOSを出した大人も真面目に取り合ってくれませんでした。だから、一人で戦い続けるしかありませんでした。もちろん家族や友人の支えがあつて生きてきたものの、どちらかと言えば孤独な31年間でした。だから、そんな苦しきさを持つている人を見逃したくなくてLETS仙台の所長を引き受けました。LETS仙台に来た女の子たちに「一緒に泣いたり笑ったりできる大人」の存在を知ってほしいのです。私も年齢的には立派な大人ですが、大人が嫌いです。大人は偉そうなことを言いながらもいざという時には自分の体裁を守るために子どもを庇うことをやめます。でも誰も助けてくれないと絶望する人生よりも、わたしは大人として女の子たちの味方でありたいというエゴが先行しました。先ほどLETS仙台を始められた理由についてそれらしく説明しましたが、正直なところ自分みたいな、もしくはもっと辛い境遇の女の子を放っておきたくないという気持ちが一番強いのです。

■公的シェルターと民間シェルター

私がこの問題に取り組んでいる原因をお話ししましたが、ではなぜ民間でシェルターを運営しているのかというと、公的シェルターや婦人保護施設は存在するのに、そこに入りたがらない人が増えているからです。

全国に四十七箇所の婦人保護施設がありますが、二〇〇七年度に平均543人だった入所者数が二〇一七年度には304人に減少しています。しかし自治体の配偶者暴力支援センターへの相談数は右肩上がりです。二〇一八年度は十一万四千件を上回り、15年間に2・6

倍に増えています。婦人保護施設の入所者の減少は、携帯電話が使えない、門限があるどころか外出が原則禁止など、制約が多いことが原因です。そうになると学生は学校に行けませんし、社会人は仕事に行けません。それでは自立がどんどん遠くなってしまう。よって柔軟に対応できる民間施設の需要が高まっています。

さらにいうと、彼女たちに必要なのは「施設」ではなく「家」であると私は考えています。ただいま、おかえりが言える環境は彼女たちにとって大事な社会復帰の第一歩です。しかしDV夫がどこまでも追いかけてくるような場合も多々あるので、そういう人にとつては民間施設よりも厳重なセキュリティを持つ公的シェルターがおすすです。生活の不自由さはありますが、公的施設の安全性には民間施設は勝てません。セコムなどに入っているいつでも警備員が駆けつけてくれる環境に安心して生活することができる女性も一定数います。もし皆さんの周りにシェルターを利用するような局面に陥ってしまった女性がいたら、状況に応じて公的施設と民間施設を使い分けられるといいと思います。

■コロナウイルスと困難を抱えている人たちの関係

現在L E T S仙台では様々な生き辛さを抱えた女性や、時々男性からもご相談を受けています。男性からの相談を時々受けるのは、コロナウイルスの影響でステイホームが徹底された中で、配偶者や親からの暴力が悪化して困っているケースが激増し、相談先としてL E T S仙台を選んでくれた男性も少なくなりました。家にずっと家族がいる事で、団欒が増えた家庭ももちろんたくさんありますが、その反面、家庭内問題が複雑化して問題が大きくなった事例も見受けられています。家という一番多くの時間を過ごし、本来安全基地であるべき場所が暴力を受ける場所になっているという状況は、当事者の気力を容赦なく奪います。相談の電話を受けて、役所や病院に行くように助言しても本人の気力は底をついているので、一人で行くことは困難です。病院や役所は、元気な人だつてあまり行きたい場所ではありませんよ。ね。気力が残っていない人は、病院や役所で伝えたいことがあってもうまく伝えられないために適切な支援に迅速にたどり着くことが難しいのです。よって、私たちL E T S仙台のような民間支援団体は役所や病院に付き添いをして、アドボカシー（代弁）をすることが必要になります。L E T S仙台というシェルターに避難してしなくても、話をじっくり聞いて伴走せざるを得ない事例がたくさんあります。正面からぶつかつてとことん相談者と話したり、行政へ橋渡ししたりするのも私たちの役目なのです。

民間シェルターはこれから広がっていく分野なので、国の制度が追いついていません。そのような中でケアハウスを運営することは非常に困難ではありますが、L E T S+仙台は宮城県内の行政や福祉業界からも注目されており、需要は非常に高い施設になりました。現在は私の力だけで回すのではなく、様々な人に助けてもらいながら運動体としても活動の広がりを見せています。例えば支援した当事者が特技を活かしてボランティアスタッフになってくれるなど、日々仲間を増やしながら活動を進めています。

■ L E T S 仙台の最近

ケアハウスとしての L E T S 仙台の日常も常に張り詰めているのかというと、そうではありません。時々緊張状態になることもありますが、基本的に回復途中の女性と私の住処なので、みんなである時はなるべく楽しい空間になるように気をつけています。その中でも、誕生日などの節目は盛大にお祝いすることにしています。物心がついてから祝われた経験の少ない、もしくは祝われた経験のない子が多いので、誕生日会の最中に「自分は何の役にも立っていないのに」「初めて祝ってもらった」と泣いていた女の子もいました。そうやって根気強く節目の日を祝ったり、日々の会話など関わりの中で愛情を注いでいくうちに女の子たちは精神的にもどんどんタフになっていきます。このように困難を抱えている人が周りの力を借りて少しずつ生きる強さを取り戻していく過程をエンパワメントといえます。

エンパワメントに成功した例として、私が体調を崩した時に、頑張つてアルバイトしたお金で出前のお寿司を注文してくれた女の子がいました。私が代金を支払うと言つても「いいからまず食べて元気になるでしょう」と言い、お金を支払わせてくれませんでした。彼女は複雑な家庭事情を持つ女の子で、入所した時はそんな気遣いができる状態ではありませんでした。その女の子は一年間 L E T S 仙台で苦楽を私とともにし、学校でも活動的に努力する中で大きく成長したのです。私は彼女の気持ちに嬉しかったですし、成長を感じて涙が止まりませんでした。貧困女子には生育歴上、共感性の低い子や一般常識が通じない子が多いですが、衣食住をともにして寄り添い、ひとつひとつ教えたり一緒に体験したりする中で女の子たちがいい方向に変化していく過程を見ることが出来ます。伴走することの意義は確実にあると考えています。

■ コロナウイルスと貧困若年層

このコロナ禍でみなさんの生活スタイルも一変したと思います。特に会いたい人に会えなかったり、なかなか外食にも出られないなどストレスフルな状態であることと思います。貧困に喘ぐ人たちも漏れることなくコロナウイルスの影響を受けました。今年「今年（二〇二〇年四月）の緊急事態宣言を受けて、インターネットカフェが閉鎖になったことはニュースとして記憶に新しいものです。その影響を受けて元々ネットカフェ難民をしていた人が路上に出ることとなりました。自治体でホテルを借り上げてネットカフェに住んでいた人たちへの居所を提供しましたが、ネットカフェに比べて割高だったためホームレス化した人が溢れてしまいました。そのような方たちへの支援は行政や民間団体が協力しあつて対応しても、全くニーズに追いつけないというのが実情でした。

みなさんは水商売や風俗業に従事している人たちの収入についてどう思いますか。きらびやかなお店で立派なスーツやドレスを身に纏い、いい生活をしているイメージはありませんか。確かにそのような生活をされている方も中には存在します。しかし、水商売や風俗嬢をしても生活ができない人が世間にはたくさんいます。中村淳彦氏の著書「新型コロナと貧困女子」によると、風俗店の寮に住ん

でいた女の子の収入が濃厚接触の危険性のため客足が遠のいたことで激減し、風俗店で働けど待機時間ばかりで、その日寮に住むお金も稼げないという状況が起こっているとあります。よって大都市の女の子たちは働く場所を求めて地方都市に出稼ぎに出ている状況が続いています。その地方都市として仙台を選んだ女の子たちが、それでも稼げず相談を寄せてくれるというケースも増えています。先日は仙台空港で出稼ぎのホストを見かけました。出稼ぎに来た若者なのでしょう。髪型と話す内容でホストであることは分かりましたが、衣服は少しよれていて、コロナ前の「ホスト」という雰囲気ではありませんでした。彼らも生きることと精一杯の若者です。

私もコロナ禍で路上生活の若者たちと出会いました。その中には男性もいました。目の前で困っている人を見過ごすわけにはいかず、相談や役所同行を行いました。

A君はコロナで派遣切りに遭いました。両親は離婚して親権者の母は去年逝去しており、父には新しい家庭があつて頼れない状況です。まずはA君を書類の上で仙台市に転入させ、一時的な居所から通える仕事探しを手伝いました。定額給付金10万円の申請も役所との話し合いでどうにかもらせることになり、その10万円を元にアルバイトとして働き始めました。現在は住み込みで働きながらダブルワークでアルバイトに通っています。いずれ何か資格を取って安定職に就いてほしいとは思いますが、今は生きることと精一杯の状況ですし、コロナの影響で雇ってくれる企業も激減しています。彼が安定した職業に就けるのは、もう少し世間が落ち着いてからの話になります。

Bさんはコロナが蔓延する前である二月に退職したものの、翌月からコロナ禍に突入し再就職できない状態です。以前住んでいた中国地方の住所から仙台市への転居手続きが遅れたため、定額給付金は間に合いませんでした。現在は短期バイトでつないでいる状態です。BさんもA君同様、何か手に職をつけた方がいいと私は考えていますが、とにかくこのご時世をなんとか乗り切らなければ明日食べるものも確保できないのです。コロナウイルスのワクチンが日本で実用化されるなど、少しでも状況に光が差したら再度未来についてともに考えなければならぬ状態です。

Cさんは貯金の一千万円を元手に5年間インターネットカフェで暮らしてきました。諸々の制度を知らなかったこともありましたが、そもそも死にたい気持ち強く、今紹介した3人の中で最も将来への希望が持てなかった人でした。しかし私が制度申請や身分証明書再発行などの申請で役所に行き、だんだん元気になるにつれていき、さらに自らの自死未遂について話して「死にたいけれどそうそう簡単に死ねないよね」「そうだよ」と言葉を交わしているうちにCさんの死にたい気持ちが消失していききました。Cさんも住み込みで働いていましたが、工場でのバイトでお金を貯めて敷金礼金を準備し、最近一人暮らしを始めました。生活保護を勧めましたが、Cさんの強い希望で受給したくないとのことだったので、どうやって生活を持ち直すのか不安でしたが、結果的にCさんの強い意思と生命力によって生活基盤を再構築することができました。これはエンパワメントに成功した事例と言えます。

では、貧困に陥る人はどんな人でしょうか。私が出会ってきた若年者の貧困理由は、ほとんどが生育歴や家庭環境に起因していました。若年貧困に関する本を読んでも、事例のほとんどが家庭環境によるものです。親から適切な教育を受けていないどころか、親に経

済的に搾取され続けたり虐待を受けて育つことが当たり前になったりしている人が悲しいことにあまりに多いのです。そのような環境で育つと、社会に対する視野や将来的展望の思考がどんどん狭まっていきます。言葉をきつくすると、彼ら彼女らは「真面目で無知」なのです。決してそれが良いとか悪いとか、そういう話ではありません。ただ現象としてそのようなことが起こっています。例えば、生活保護という言葉を知っていても、自分が生活保護などの諸制度に該当すると思っていない人がたくさんいます。財布と口座に入っているお金が全部で千円を切ってもどうにかなると思っていたり、危機的な金欠ゆえに暴力の対象であり続けたりと、明日以降のことを考えられなくなっています。また、親や他人に押し付けられた借金を払う必要がないのに払わなければならないと思っている人も見受けられます。連帯保証人でもないのに、家族に搾取され続けた子たちを何人も見てきました。彼女たちも生きていくために搾取され続けているのです。生活保護は健康な人は受けられないという勘違いも沢山の人が抱いているものです。生活保護には様々な条件がありますが、健康で働けるのに貧困に陥る場合も多々あります。例えばコロナ禍での失業者や、親や配偶者、恋人からの暴力や搾取によって働けない人など、様々なケースが考えられます。申請が通るか否かは別として、お金がなければ生活保護を申請する権利は誰にでもあります。困ったらまずは役所にSOSを出せることも生きていく力の一つです。

また、社会保険や親などの扶養に入っていない人が、病院に行かないで済むので健康保険証は要らないと思っている場合もあります。が、「国民皆保険制度」といって日本国民は健康保険に入らなくてはならないという決まりもあります。「享受できるものは最大限活用して、決まっている年金や健康保険には加入する」。この大原則はぜひ覚えていてください。もし貧困に陥ったら、また困窮者が助けを求めに来たらそうしよう、と頭の片隅に置いておいていただければいいのです。自分は貧困と無関係だと言い切れますか。お家が裕福でも、もしかしたら明日ご家族が事故で亡くなるかもしれません。健康な人でも、突然精神病を発症したり事故に遭ったりして働けなくなるかもしれません。貧困は遠い国や自分たちには関係のないところで起こる問題ではなく、いつも私たちの隣にあるものです。

■具体的に使える制度について（高等教育の修学支援新支援制度）

では、いざと言うときに使える制度にはどのようなものがあるか、具体例を交えてお伝えします。学校に行きたい子のことや、若年妊娠、そしてカルト問題。話はまた重たいものですが、聞いてください。

まず今年度から「高等教育の修学支援新制度」という制度が始まりました。これは大学や短大、専門学校の学費の大半を「給付」という形で支援してもらえる上に、自宅から通う学生と一人暮らしの学生で金額は変わるものの、生活費も「給付」してもらえる仕組みです。昨年度までは低所得世帯の学生は借金である奨学金を大量に借り、なおアルバイトに明け暮れないと高等教育を受けることは困難でしたが、この制度の登場により低所得世帯であっても進学のハードルが一気に下がりました。生活保護についてはここで語り始め

ると、生活保護だけで30分くらい使うことになってしまうので「生活保護 厚生労働省」で検索してみてください。こんなに支援してもらえないの?!とびっくりするほど生活保護は手厚いです。借金ではありませんが社会福祉協議会での生活福祉資金という善良的な貸付という手段もあります。困窮して困ってもどうにか生きていけるように制度は整っています。そのような場合、役所に助けを求められることをぜひ覚えておいてください。

ただ、高等教育の新支援制度の登場によって私が危惧していることもあります。それは最終学歴が大学卒業であるか、専門学校などで手に職をつけるかしないと安定した就職が困難な時代を迎えようとしていることです。ブラック企業や性産業などに搾取されないためにも大学に進むことが必要な時代になるうとしています。学ぶことはとても良いことなので、もしみなさんの身近に困窮している中で進学したいという子がいたら、「高等教育の新支援制度」の存在を教えてください。実際、私が支援しているご家庭の子が来年から新制度を使って専門学校に通うことになりました。制度についてご家族に説明したところ、あまりの手厚さに驚かれました。この制度については文部科学省のHPに詳しく書いてありシミュレーターがあつたりするのでぜひ見てみてください。誰もが平等に高等教育を受けられる日本であるべきであると思います。

■若年妊娠について

さて、話がガラリと変わりますが、若年妊娠という言葉聞いたことはありませんか。文字のとおり、10代などの若い人が妊娠することです。若年妊娠について、どんなイメージがありますか。「はしたない」「無計画」。いろいろな意見があると思いますが、決してポジティブなイメージは多くないと思います。でも、不思議なことに妊娠して非難されたり怒られるのは女性である場合が多いです。妊娠は一人ではできないのに、なぜか女性だけが責められてしまうのです。妊娠自体はとても喜ばしいことなのに、適切な性教育が行き届いていないせいでネガティブなイメージを持たれがちです。これは「大人」の責任です。保健体育の教科書でも、図に書いてあるのは精子と卵子が出会った瞬間です。どうやって精子を卵子に送り込むのかという記述や図は表記されていません。そのためにこれからの時代は包括的性教育が求められます。

様々な課題を抱えた妊婦さんたちに寄り添うために、私は仙台市にある特定非営利活動法人キミノトナリでも活動をしています。キミノトナリは二〇二〇年五月に登記が完了し、私は理事になりました。キミノトナリは「にんしんSOS仙台」として活動中で、予期せぬ妊娠の相談窓口です。構成メンバーは助産師、弁護士、社会福祉士、保育士、臨床心理士、キャリアアコンサルタントなどが相談員を務めていて、一般のメンバーとしては社会的養護の関係者、主婦、学生など様々な人が参加しています。

どんな事をしているかというところ、例えば生理が遅れていて妊娠の可能性があるが怖くて検査ができない場合は、検査をしているトイレの隣で待機しています。協力病院や役所の付き添いもします。制度で支えられる場合は制度を駆使して出産に挑みます。病院、役所

の付き添いが必要な理由は、先ほどお話したとおり、困難を抱えて戦うことに疲れた女性が一人で病院や役所に行っても、適切な支援に繋がりにくいからです。

妊娠出産は女性にとって一大事です。出産前後はどうしても環境依存になるため貧困に陥りやすく、例えば夫からDVを受けている女性はその状況に抗えずDVを受け続けてしまいます。また、高校生などの若年妊娠の場合は家庭環境に左右されます。人間は環境の中で生きるしかありませんが、女性は特に環境に左右されやすいのです。妊娠することは決して悪いことではありません。ただ、相手の責任問題や婚姻関係など環境が大切になってきます。妊娠して中絶したいなら、それも悪いことではないし、中絶できる週数を過ぎてしまったなら特別養子縁組として子どもを養子に出すことだって悪いことではありません。養子待ちわびている夫婦も世の中にはたくさん存在します。私には特別養子縁組で育った友人がいます。彼女は結婚を機に両親から告知を受けましたが、それまで、そしてそれから両親から愛情をたくさん受けて育ったため、とてもしっかりしていて優しい人に育ちました。

問題になるのは、母親になる妊婦さん本人の気持ちです。わたしはこうしたい、と言える環境が大切になります。大人は本人たちの話を怒らずに聞いてあげてください。女の子は意思をしっかりと持ちつことが大事になります。そして男の子は逃げないように気をつけなければなりません。産むか産まないか、そして自分で育てるか誰かに育ててもらおうかを決める権利が、子どもを作ったペアにはあります。その決断に困った時に私たちのような「にんしんSOS」は当事者の隣で伴走し続けます。妊娠した女の子も、妊娠させた男の子も一人ではないから、とにかくお住まいの地域のにんしんSOSにヘルプを出して欲しいと思います。私たちは妊婦さんや相手の男性を責めません。相談者さんが自分で決められるように一緒に考えたいのです。

■カルト三世の具体的事例と使える制度について

さて、最後にカルトに起因する貧困や虐待、そしてその対処方法を、事例を通してお伝えします。みなさんの中にはお坊様もいらつしやることと存じますので、カルト問題についても知って欲しいと思います。

一般の虐待は、衝動性や私的感情が原因となりますが、カルトの場合は教義に則って虐待が行われるため、親自身が基本的に善意で虐待を行うという側面があります。カルトの教義のために「虐待を行うことが正しい」という認知の歪みが家庭内虐待を生んでいるという事実があるのです。一般の虐待は内発的動機付けに起因しますが、カルトの場合外発的動機が原因なのでカルト教団内の虐待が似るといえるケースもあります。例えばある団体では、教義に逆らった二世である子どもに対して鞭で打つことを推奨しています。そうしないとその子どもは天国へ行けないので、親は善意で子ども叩きます。鞭の種類は家庭ごとに異なりますが、靴べら、延長ケーブル、ベルトなどが有名です。また、高等教育の否定のために教育の機会を奪うことで、二世たちの思考力が育たない状況を作るといこともあります。金銭的搾取が行われる団体も多数存在します。このように、他人から見えない環境下でカルト内の虐待は日々行われています。私が関わったカルト事例の中で最も関わりが深く、また深刻な問題を抱えたDさんの虐待の具体的事例を交えながら困窮への対策についてお話します。

某団体三世の20代女性のDさんは、母子家庭で二世である母親から虐待を受けて育ちました。Dさんはカルト三世であるとともに、母親が性被害を受けたことがきっかけで生まれてきた子どもでした。よって、これからお話しする虐待の内容はカルトが起因するものとも、母親の私的な感情から行われたものとも区別しにくいところがありますが、母親の私的な理由での虐待がカルトの教義によって歯止めが効かなくなった状態であると考えられます。

児童虐待には大きく4つの種類があります。身体的虐待、精神的虐待、ネグレクトと呼ばれる育児放棄、そして性的虐待。Dさんが受けた虐待はこれらに加えて金銭的虐待も含む過酷なものでした。

身体的虐待としては、日常的に頭を冷水に沈められる、首を絞められる、膝でみぞおちを蹴られる、髪を掴まれて引きずり回される、階段から突き落とされるなどショッキングな内容が挙げられます。特に最も衝撃的なのは、当時住んでいた5階のマンションのベランダから吊り下げられ、その上そのまま地上に落下したというエピソードです。幸いにも家の下にゴミ置場があり大事に至りませんでした。通行人に心配されているところを母親に目撃され、家に戻って「人に見られてんじやねーよ」とまた殴られたそうです。

精神的虐待で一番きつかったのは、返事が「はい」しか許されなかったことだったとDさんは語ります。尋問のような質問に「いいえ」と言うだけで殴られてしまうので、全ての問いかけに「はい」と言わざるを得ず、それが精神的成長を妨げたとDさんは振り返ります。また母親からは「お前は奴隷」だど何度も言われて育ちました。

ネグレクトとしては専業主婦の母親の代わりに毎日ご飯を作らされ、その残飯をこっそり食することしかできない、お風呂に入れてもらえない、夜中一時から朝七時まで下着のまま家の外に毎晩出され眠ることを許されない、など生命の危機に関わる虐待が行われました。

経済的には、母親の遊びのためのお金を稼ぐために、高校に入ってからアルバイト漬けの生活になりましたが、それでも母親は満足いかずDさんの中退させ働かせました。

そして性的虐待。最初の被害はDさんが8歳のときのことです。Dさんが学校から帰宅すると、珍しく母親と一緒に風呂に入って身体を丁寧に洗ってくれ、綺麗な服を着て、化粧してもらったそうです。そして二人で向かった先はカラオケ店でした。そこで母親は男性にDさんを引き渡し、Dさんはその場で男性から暴行を受けました。その日以降、Dさんは中学生まで売春を強要されました。

Dさんはこのような虐待を受けることが当然の家庭で育ったため、家を出た今でも時々虐待のフラッシュバックを起こしたり、暴力的でない生活に対して逆に恐怖心を抱いたり大きな後遺症を抱えています。

Dさんのように虐待を受けて育ち、成長してからはひたすら金銭を搾取される二世以降の子どもたちは少なくありません。信仰熱心な家庭で虐待を受けて育った二世以降の子どもたちは絶望的な生活困窮に陥りやすい境遇にあります。しかしその子どもたちは、SO

Sを出すという思考が働きません。親の持つている価値観に従う他、救われる道がないという心境もありますが、助けてくれる人への恐怖心もあります。周りの大人や行政などが介入して、逆に親に仕返しされるのが怖いという心理状態も手伝い、外部の第三者に「助けて」の一言が言えませんか。この心境は若年貧困者と非常に類似しているものです。

Dさんも自分の置かれている状況を自身で把握した時にはすでに生活の全てがままならない状況でした。しかしその状態に陥つてもなお、「生活保護を受ける」という制度的発想には至りません。一般的にカルトにいる間は私有財産の所持禁止が原則となります。お金は「稼いで献金するか、もしくは親に搾取されるもの」であって、公的扶助を受けるという発想に至りにくい側面があります。またカルトにいる間は高等教育が受けられない場合が多く、家庭でも一般的な教育が行われないため、どれほど生活に困窮しても市区町村の役所に足を運ぶという選択肢がそもそも存在しないのです。

私とDさんとの出会いは5年前で、Dさんの恋人であるEさんを通じて知り合いました。Dさんは、たまたまマインドコントロールやカルト問題に詳しい知識を持っていたE君と私が偶然出会ったことで、奇跡的な綱渡りの上に救えた命です。

Dさんは、私が介入した段階で健康保険証を母により破棄されており、住所も定まりませんでした。住所が定まらなかった原因は、母親からの虐待から逃げていたこと、身分証明書を破棄されていたため家を借りることができなかったこと、その上母親からの金銭的搾取によりお金がなかったことが挙げられます。落ち着いて暮らすことのできる環境がない上に、母親からの虐待後遺症に悩まされていたこともあり、彼女は自死を考えており、その前に、せめてE君に自分の人生の事情を全部知っておいて欲しいという心境で遺書代わりにE君に虐待と宗教被害について打ち明けました。その当時Dさんは非常に疲弊しており、主体的に動くことはできない状況でした。また、母親との関係性から、女性と関わりを持つことも厳しい状況でした。そこで私からE君にアドバイスをを行い、E君に主導してもらいながら様々な機関を回ってもらいました。

最初に訪問して頂いたのは法務局です。以前市役所で住基ブロック（住民票と戸籍附票の開示制限）の手続きをした際に、市役所職員から母に確認が入ったため、Dさんの住所が母に知られてしまい、母が押しつけてきたという不手際があったため、再発防止のため、法務局で戸籍の相談を行いました。法務局は市役所と一緒に戸籍の管理をしている機関なので、戸籍のことでトラブルがあった際は、法務局の担当職員の名前を出すことによって市役所での対応が変わることがあります。

次に区役所で国民健康保険に加入し、保険証を取得しました。年金事務所へ行って年金手帳も再発行してもらいました。Dさんは顔写真付きの身分証明書を持っていなかったため、パスポートセンターで有効期限10年のパスポートを取得しました。また、ようやく移り住んだアパートの場所を母に知られて押しかけてくることのないように、住民票と戸籍の付票の開示制限（住基ブロック）をかけたまま利用する手続きです。程なくしてDさんの貯金が尽きましたので、福祉事務所で生活保護の申請を行い、無事に保護を受けることができました。Dさんの場合、虐待後遺症として心理的問題があったため、就労が困難だったことが生活保護を受ける大きな理由となり

ました。生活保護には医療扶助というものがあり、実質無料で医療機関を利用することができます。これによってDさんは適切な診察と治療を受けることができるようになりました。これでDさんは落ち着いた生活を手に入れることができました。

このような事例に直面した際の支援のポイントは2点です。

まずは、当事者の親類からキーパーソンとして手助けをしてくれる人の存在を見つけることです。キーパーソンがいると保証人や緊急連絡先などの手続きが順調に進みます。Dさんの場合は伯父が手を貸してくれたおかげで行政に対してスムーズに事を運ぶことができました。

また、カルトだけではなく貧困の人など困っている友人を助けたいと思ったときに、専門職でなくてもできる支援として覚えていていただきたいのは、「病院や行政機関に行く際に、当事者の状況や困りごとをまとめたメモを持参して行く」ということです。混乱の渦中にある当事者は、客観的に自分の状況を伝えることが困難です。少し手間はかかりますが、箇条書きでもいいのでメモを作って本人に持たせてあげてください。項目としては、名前、生年月日に始まり、どんな背景があつてなんで困っているのかというものがあるといいです。



- ・名前
- ・生年月日
- ・背景
- ・困っている理由

もちろんあなたの同席が許されるなら、同席して本人のサポートに回ることも必要です。このメモがあることによって必要な手続きや話し合いがスムーズに行われるため迅速に支援を受けられる可能性が高まります。また、メモに経緯をまとめておくことで本人が話すという心理的負担を軽減することもできます。「この支援は特に専門的な知識を必要とせずにできる上に効果的だった」とキーパー

ソンになったE君もお話しされております。メモがあるか否かで生活保護を受けられるか、病名がつかないなど状況が大きく変わりますので、ぜひ覚えておいてください。

一般の人よりも脱会者の方が生活保護に対する抵抗感が強いという問題がありますが、支援者が根気強く本人の状況整理や説明を行い、緩和に向けてのケアを行う必要があります。

カルト被害者を脱会させるための心理的アプローチを脱会カウンセリングと呼びます。緩和ケアについては、制度面で生活を整えながらの脱会カウンセリングが有効であると考えております。困窮した二世たちは、カルトという世界からカルトの外側という世界に出ていかなければなりません。これは、簡単に例えると何の準備もなく海外へ引越すようなものです。カルチャーショックが常に付きまといまいます。カルトの中の世界と外の世界との間で通訳をしたり異文化の常識を教えるという橋渡し役が、脱会カウンセリングを行う人の担う役目となります。脱会後遺症の治癒には非常に時間がかかります。むしろ一生癒えない傷といっても過言ではありません。しかし寄り添い、伴走する人の存在は、少しずつ脱会者の傷を癒していくものです。傷が癒えると、本人に精神的ゆとりができ、だんだん動けるようになってきます。Dさんは現在、抱えた傷と戦いながらも自分を客観視し、自分のような境遇の子どもが少しでも減るようにと活動を行っています。このように急速に回復していくケースは非常に稀ではありますが、Dさんのように、最初は周りの力を借りて、後々は自分の意思で動けるような人が増えていくことを目指しています。

カルト被害者に福祉制度を用いて支援する場合も、一般の生活困窮者への社会福祉的アプローチとプロセスは同じです。しかしカルトという認知を歪める存在が介在するため、支援者は少しでもカルトやマインドコントロールの仕組みを理解している必要があります。DさんがE君に初めて自分の辛い過去を話した時、疲弊しきっていたDさんは虐待の事実を話すことはできても、カルトの教義や構造まで他人に一人から説明する気力はありませんでした。たまたまE君がカルトの事情に詳しく、理解もあつたので全てを打ち明けたらとDさんは語ります。それぞれのケースを個別化して、この宗教だからこういふ事情だろうと決めつけないことを前提として、私たち福祉専門職もカルトについて学ばなければならぬ時代が訪れようとしています。社会福祉士の業務範囲はとも広く、子ども、高齢者、障害者をはじめ低所得者や外国人、刑務所を出所した人たちへの支援も行います。そこにさらにカルトという存在も遠くない未来に追加されることを祈るばかりです。カルト対策先進国であるフランスでは、すでにカルトに対するソーシャルワーカーが存在しています。

日本は義務教育で宗教を教わらない上に、自らの宗教性に鈍感である人が多いです。声を上げはじめた二世たちの声を受け止めきれない現状があります。社会福祉の観点から救える命は潜在的に多数存在しているはずなので、私たち福祉専門職も宗教やカルトについて勉強する必要があります。

また、脱会カウンセリングに携わる人も被害者を福祉に繋げるという発想を持って頂くことが必要となります。脱会カウンセリングの現場は常にカルト問題対策の最前線です。その最前線で早期に福祉制度を用いて相談者の生活を安定させることで、その後のカウンセリングの効果も変わってくると思います。本人や家族の精神的ケアや脱会は急務ではありませんが、その前に福祉制度の存在を思い出して福祉専門職や役所に繋ぐことも大切な支援となります。

カルトに詳しい福祉専門職が必要。カウンセラーも社会福祉に繋げる視点が必要。

それを牧師である竹迫先生と社会福祉士の私とで協働し、実践、研究しています。これからも実践と研究を繰り返し、少しずつでも被害者を減らし、そして社会に対してカルト対策と社会福祉の親和性を提唱していけるように、微力ながらも邁進していけたらと思います。

■おわりに

生活困窮者支援に関わる仕事をしている人にとって、毎年、年末年始はお休みすることができない時期です。なぜなら役所が開いていないからです。今年はさらに事情が深刻です。コロナウイルスによつて失業者がどんどん増えている状況下でお正月を迎えることとなり、各団体が対応に迫られる支度をしています。また、厚生労働省からの事務連絡によつて福祉事務所の臨時開所が求められ、東京都江戸川区の福祉事務所は年末年始の稼働を発表しています。困窮者当事者にとつても支援者にとつても今年のお正月は正念場です。

駆け込み寺という言葉を知らない日本人はいないと思いますが、みなさんのお寺にもホームレスなど居所と食料、そして金銭に困っている人が駆け込んでくる可能性があります。どうかその人たちにおにぎりを渡すとか、数千円渡すとか、そういう支援で追い返さないでください。その人たちに必要なのは公的支援です。その場凌ぎの物資提供は骨折している人に絆創膏を貼るような行為で、なんの解決にもなっていません。

よつて皆様をお願いしたいのは、生活困窮者が困っていたらお正月が明けるまでお寺に泊めるなどして、役所が開き次第生活保護などの相談に連れて行ってあげて欲しいということです。何度もお話ししてきましたが、彼ら彼女らは自力で役所に行きたがりません。そこを説得し、行政支援につなげることで命を繋いでください。先ほどお話しした、経緯や困りごとをまとめたメモを持参するという方法が非常に効果的です。たとえ焼石に水だとしても、そうやって一人ひとりに支援をしていくしかありません。みなさまの慈悲の気持ちで一人でも多くの命が救われることをお祈りしつつ、ここで終わらせていただきます。ありがとうございます。

あとがき

二〇二〇年十二月十五日、真宗大谷派金沢別院・真宗会館ホールで公開講座「私が私であるために」が開催されました。主催は真宗大谷派金沢教区解放運動推進委員会、講師は（女性用ケアハウス）LETS仙台所長で社会福祉士の松田彩絵氏、講題は「コロナ時代に生きる苦しみ」でした。この冊子はその講演録です。

LETS仙台の「LETS」とは、Liberation（解放）、Empowerment（回復）、and Treatment（手当）for Survivor（当事者のために）という言葉の頭文字を組み合わせたものです。LETS仙台は、二〇一九年五月に、福島県にある日本基督教団・白河教会の牧師である竹迫之氏と共に松田彩絵氏が開設された現代の駆け込み寺のような施設です。そのLETS仙台の資金集めのためのクラウドファンディングへの協力という形で、私がカンパしたそのリターンとして今回講演していただくことになりました。LETS仙台の詳細については、この講演録を読んでいただければよく分かると思います。

講演の最初に松田氏は、「56936」と「75798」の二つの数字を挙げられました。前者は日本のコンビニの数であり、後者は寺院の数でした。松田氏は、もし全国の寺院がLETS仙台のような駆け込み寺的な役割を果たすことができれば、多くの人の命を救うことができるに違いない、と指摘され、私は改めて寺院の数の多さに驚くとともに、本当にその通りだと頷かざるを得ませんでした。

講演で挙げられている事例は、一つ残らず深刻な内容でした。その中で、私に直接かわりのあると思われる指摘は、もし困った状況にある人が助けを求めてきたら、お金をあげたりおにぎりをあげたりしてその場しのぎの対処をするのではなく、継続的に支援していくことが大事だということでした。そして、そのために具体的に何をすればいいか、例えばメモを持って役所に行きするなどの方法を教えてくださいました。

13ページのメモの内容は、講演にはなかったメモです。

講演会の後、解放運動推進委員会の一人から、「講演録を作る際、メモにはどのような項目を書いたら良いのかを明記してほしい」というお願いがあり、講師の松田氏に確認をして入れさせていただきました。

この冊子を読んで、困った状況の方に実際に出会ったときには是非、項目についてその方に尋ねてメモを作り、役所に同行してあげてください。私は今回の講演を「いいお話を聞いた」で終わるのではなく、実践することが何より大事だと思っています。

最後に、この講演会は、金沢教区解放運動推進委員会の方々のご協力により開催することができました。特に講演の準備の段階から、この講演録の原稿の校正まで関わってくださいました寺本菜都奈氏（解放運動推進委員会幹事）には心から感謝しています。そして、一人でも多くの方にこの冊子が読まれることを願って止みません。

二〇二一年一月末日

浄専寺住職 平野喜之

発行者 真宗大谷派 浄専寺 平野 喜之

〒929-1215 石川県かほく市高松ツ 66

TEL・FAX 076-281-0546

Email : yoshiyuki.h.1192@gmail.com

ホームページ : かほく市浄専寺

印刷 : 就労継続支援B型 ふれあいの里

大阪市西成区南津守 1-4-46